

第 302 回 昭和の森 自然観察会

冬の樹木の百面相～様々な冬芽の観察～

佐野由輝（大網白里市）

日 時：2017 年 2 月 12 日（日）13：00～15：00

参加者：15 名（大人 14 名 子ども 1 名） 指導員 10 名

担当指導員：佐野由輝 佐藤一枝

立春は過ぎたとはいえ、まだまだ、寒さの厳しい中、落葉樹を中心にして、樹木たちが冬芽の中で春の準備を進めている様子を観察しました。

はじめに、あずまやのそばの桜の木を観察して、冬芽には春になったら花が咲く花芽と葉っぱが広がる葉芽があること、冬の寒さと乾燥から身を守るために、重ね着（芽鱗）をしていること、芽鱗の痕から、一年間で伸びた枝の長さが分かること等、冬芽を観察するポイントを伝えました。

そして、太陽の広場の林縁、市町村の森、花木園を廻りながら、服を着ないで裸で頑張るニガキ、体（樹皮）の中に隠れているハリエンジュ、ひときわ大きなカシワ、ぜいたくに毛皮のコートを身にまとったコブシやモクレン、ちゃっかり葉っぱの柄の中でぬくぬくハクウンボク等、樹木によって様々な姿の冬芽を、触って感触を確かめたり、目の前に近づけてじっくり観察したりしました。どの樹木も冬を乗り切るための知恵と工夫が冬芽に凝縮されていることを実感し、皆さん、感心している様子でした。さらに、ひとつひとつの樹木の冬芽をよく見ると、葉痕、木の肌の模様、とげなどの様子とセットとなり、冬芽が笑っているように見えたり、動物の顔に見えたり、子どもの顔に見えたりと、自然が作り出す偶然の造形美に、寒さも忘れて見とれていました。

さて、昔から自然と一体となって生活してきた日本には、わずかな自然の変化を絶妙に表現する言葉があり、冬から春にかけて冬芽から新芽が出てくる様子を「芽ぐむ」「芽吹く」「芽立つ」と表現すると伝えると、今の冬芽の様子がどの状態なのか、興味津々に観察していました。

草花も枯れ、樹木も葉っぱを落とし、鳥や虫の声も聞こえない冬の自然は、一見、寂しさを感じますが、冬芽の観察を通じて、樹木たちの生命力を感じる観察会でした。

